Osaka University Knowledge Archive

Title	東日本大震災における宗教者・宗教研究者の連携
Author(s)	稲場, 圭信; 黒崎, 浩行
Citation	宗教と社会貢献. 2011, 1(2), p. 99-105
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/20174
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

東日本大震災における宗教者・宗教研究者の連携

稲場　圭信・黒崎　浩行*
INABA Keishin and KUROSAKI Hiroyuki

1. 宗教者災害救援ネットワーク

2011 年 3 月 11 日、東日本を襲った巨大地震、そして続く大津波により多くの方々が犠牲となった。何かお役に立てないか、ほっとけない、居ても立って居られないと救援活動に動き出した人たちがいた。その中に宗教者もいた。震災の当日に大震災対策本部を立ち上げた教団もある。そして、迅速に現地へ先遣隊を送った。

宗教的利他主義、宗教の社会貢献を研究する者として、一人の人間として傍観者でよいのか。地震から 2 日後の 13 日、稲場圭信は『社会貢献する宗教』（世界思想社）を共同執筆した研究者仲間の黒崎浩行、大谷栄一氏（佛教大学准教授）、櫻井義秀氏（北海道大学教授）、藤本頼生氏（現・國學院大學専任講師）に、そしてネット上での情報発信を積極的に行っている樫尾直樹氏（慶應義塾大学准教授）と小堀馨子氏（國學院大學研究開発推進機構共同研究員）に呼びかけ、「宗教者災害救援ネットワーク（略称 : 宗援ネットワーク、英語名称 : Faith-Based Network for Earthquake Relief in Japan」（http://www.facebook.com/FBNERJ）を立ち上げた。

13 日の深夜に送信した稲場のメールは以下のようなものであった。

> この度の東日本大震災、津波により、ご自身が、あるいは、家族・親族・友人が被災者かもしれません。大切な方を亡くしている人もある

* 稲場圭信：大阪大学大学院人間科学研究科・准教授 k-inaba@hus.osaka-u.ac.jp
黒崎浩行：國學院大學神道文化学部・准教授 hkuro@kokugakuin.ac.jp

かもしれません。自ら被災しながら、助け合いの行動をしている人もいることでしょう。未曾有の大災害に、「ほっとけない」と支援に動き出した人もいるでしょう。被災者のために、何かお役に立ちたいけれど、何をしてよいのか、何もできないと煩悶としている人もいるかもしれません。世界各国からも、宗教・人種・国境をこえて、メッセージ・祈りが寄せられています。教団、宗派をこえて、思いを、願いを、祈りを、安否の情報を、救援の情報を、活動場所の情報を、義捐金情報を、様々なものを共有できたらと思います。

現地の宗教者からツイッターやフェイスブックで情報が入ってきた。各教団もホームページで被災状況や救援活動の情報を公開し、各種メディアも宗教者の活動を取り上げた。教団や個々の宗教者たちからもメールが届いた。それらの情報を宗教者災害救援ネットワークに集約していったのである。数ある情報から、必要なもの、関連するものを収集する。そして、引用元を明示する、リンクさせる。しかし、個人でできることは限られる。知らぬ情報も当然ながら多数ある。知り合い、さまざまな人が情報を寄せてくれる。それを取捨選択し、サイトに投稿する。見知らぬ人によるサイトへの直接投稿もある。

サイトの立ち上げから 10 日ほどで記事表示回数は 10 万回を超えた。その後､5 月上旬で 35 万回であった｡9 月末の段階では 80 万回を超えている。

「宗教者災害救援ネットワーク」は情報を共有・発信し連携する場である。サイトには以下のような情報が集まっている。

・宗教団体の被害状況・安否情報
・対策本部・救援活動
・募金呼びかけ・教団による義捐金寄付
・避難者受け入れ
・祈り、供養、法要
・心のケア

被災地でボランティアをしている宗教者の中には、ネット上の情報を見て、自分ひとりではない、社会が見てくれている、エールを送ってくれて

いると感じている人もいる。また被災地に向かえない人たちも、サイトをみて苦難にある人たちへ心を寄せ、活動をしている人と心をともにしている。サイトをみて、教会での受け入れ情報をメールで送ってくれた牧師もいる。追悼集会の情報を寄せてくれる僧侶もいる。

宗教者には、利他主義に基づいた人助けの行為があろう。宗教者災害救援ネットワークはインターネット上の情報シェアの場であるが、そのような宗教的利他主義により、見知らぬ人どうしが、苦難にある人へ寄せる思い・願いでつながっている。そして、後述する宗教者災害支援連絡会という実際に顔の見える集いの場があり、宗教・宗派を超えて、信仰の有無をこえて連携の輪が広がっている。

2. 宗教者災害救援マップ

3 月 15 日、稲場は、Google マップの要望・提案のコーナーに以下のような質問を書き込んだ。

> 今回の震災で被害にあっている宗教施設もありますが、大丈夫なところは、避難所、ボランティアの拠点、情報共有の場として機能します。被災地の神社・寺院・宗教施設をマップ上に表示できませんか。

この書き込みに対して、システムの技術的アドバイスを返信して下さった方がいた。また、すでに金光教首都圏フォーラムによる「教会の震災安否マップ」が立ち上がっており、マップの管理者である中谷建夫氏が協力してくれた。いくつかの教団の方々も協力して下さり、マップに上げる情報も集まりだした。システム構築は、黒崎が中心となって担当し、3 月 19 日には「宗教者災害救援マップ」が立ち上がった。

宗教者災害救援マップは、各宗教施設の被災情報および救援活動の拠点を表わしている。宗教施設も被災しながら、それぞれに檀家、信者、氏子、地域住民とともに苦境を乗り越えようと日夜取り組んでいる。災害状況の把握、救援のための情報共有、そして復興にむけての連携の土台として、この地図を作成した。

教団から提供していただく情報や、宗教年鑑（文化庁）及びネット上に公開されている情報をもとに作成している。その後、「疎開受け入れ寺院マップ」を公開していた真言宗智山派僧侶の竹井宗徹氏をはじめ、大阪大学や東京大学の院生たち、板井正斉氏（皇學館大学准教授）や皇學館大学、國學院大學の学生、院生たちも情報入力のボランティアに参加してくれた。

情報の数が増えてくると、通常のグーグルマップのシステムでは重く、閲覧しにくくなってきた。そこで、竹井氏や、後述の宗教者災害支援連絡会が利用している SNS システムの開発者である和﨑宏氏（株式会社インフォミーム代表取締役）から技術的なアドバイスを受けつつ、黒崎を中心に検討を重ね、3 月 30 日に新たなマップ・システムでの公開となった（http://sites.google.com/site/fbnerjmap/）。

その後、被災者受け入れ情報マップ、宗派・教団別マップ、聞き取り訪問した施設マップなど、サイトの情報量は増えていった。

将来的には、日本全国の宗教施設のデータが集まり、宗教・宗派を超え

ての連携が取られ、災害に強い社会ができることを願う。たとえば、同じ地域で、災害に備えて水や食料の蓄えを、消費期限を半年ごとにずらして設定して行い、期限が来ればフードバンクなど反貧困に取り組んでいるＮＰＯなどへ寄付し、また新しい水や食料を購入する。大災害が起きれば、連携しながら水や食料の融通をし、また外部から救援に入る宗教者、ＮＧＯ、さまざまなセクターは、災害救援マップのデータをもとに、食料の状況や救援活動の拠点情報を把握し、連携しながら救援活動を行う。このような仕組み作りは、いざという時の善意の心による取り組みと同様に大切なもの、備えであろう。

3. 宗教者災害支援連絡会

4 月 1 日、「宗教者災害支援連絡会」（宗援連）（代表：島薗進東京大学教授、http://www.indranet.jp/syuenren/）が設立された。

宗援連は宗教者･宗教団体による被災者支援のより有効なあり方を目指し、宗教や宗派の別を超えて情報交換を行い活動を拡充していこうとするものである。被災地支援、心のケア、追悼の時呼びかけ、避難者受け入れ、シニアボランティア、被災地宗教施設聞き取り調査連携など情報交換を行っている

世話人は、代表である島薗進氏の他、岡田真美子氏（兵庫県立大）をはじめ、葛西賢太氏（宗教情報センター）、金子昭氏（天理大）、佐藤丈史氏（日本キリスト教連合会）、宍野史生氏（扶桑教・教派神道連合会）、高橋孝信氏（東大・東大仏青理事長）、戸松義晴氏（全日本仏教会事務総長・日本宗教連盟事務局長）、蓑輪顕量氏（東大）、本山一博氏（玉光神社・新宗連）らである。稲場・黒崎も設立から関わっている世話人である。

宗援連は 4 月から毎月、9 月から 2 ヶ月に一回、東京大学仏教青年会ホールにて情報交換会を開いている。毎回、70 名ほどが参加し、被災地で支援活動をしている宗教者に報告をしてもらったり、今後の活動について検討したりしている。

これまでの情報交換会の報告タイトルは以下の通りである。

第 1 回情報交換会（4 月 24 日）

・「宗援連災害支援連絡会の設立経緯と趣旨」島薗進氏
・「宗教者災害救援ネットワークとの関係」稲場圭信
・「東漸寺の場合」鈴木悦郎氏（松戸市・浄土宗東漸寺住職）
・「天理教の試み」西尾典和氏、金子昭氏

第 2 回情報交換会（5 月 22 日）
・「宮城県の宗教者による支援と『心の相談室』」　鈴木岩弓氏（東北大学教授）
・「被災地での活動から見えてきたこと――避難・読経ボランティア・被災寺院支援」東海林良昌氏（宮城県塩竈市浄土宗雲上寺、浄土宗青年会東北ブロック常務理事）　ほか
・「分科会」　被災地支援／避難・疎開受入の促進／心のケア

設立当初は、福島第一原子力発電所の事故による避難住民の宗教施設での受け入れが重要な課題のひとつと考えていたが、震災から三ヶ月の取り組みを経て、宗教者らしい追悼のありかた、寄り添いのありかた、心のケアなどに重点が移って行った。第 3 回から第 5 回の情報交換会は以下のようなものであった。

第 3 回情報交換会（6 月 19 日）
・「『追悼のとき』の提案」箕輪顕量氏
・「宗教者による『心のケア』のあり方」　谷山洋三氏（臨床スピリチュアルケア協会事務局長）
・「被災地支援と宗教協力」　茅野俊幸氏（シャンティ国際ボランティア会専務理事）
・「岩手県における宗教者の被災地支援」吉田律子氏（真宗大谷派）

第 4 回情報交換会（7 月 24 日）
・「東日本大震災と神社」西舘勲氏（岩手県神社庁長）
・「立正佼成会の救援活動、また他教団との協働」保科和市氏（立正佼成会教務局社会貢献グループ次長）
・「キリスト教の被災者支援」稲垣博史氏（東日本大震災救援キリスト者

連絡会現事務局長、牧師）・高橋和義氏（同会次期事務局長、牧師）

第 5 回情報交換会（9 月 11 日）
・「真如苑救援ボランティア（SeRV）の支援活動等の経緯と現状」 西川勢二氏（真如苑東日本大震災復興支援センター責任者）
・「原発事故被災寺院の現状と復興への道」林心澄氏（真言宗豊山派清水寺住職、東電原発事故被災寺院復興対策の会事務局長）
・「震災支援活動で見えてきたこと――金光教首都圏の場合」 田中元雄氏（金光教大崎教会教会長・金光教首都圏地震等災害ボランティア支援機構）
・その他の報告（いわき市のボランティア活動について／被災者受け入れの現況について／宗教・宗派を超えた協力活動の状況について／その他）

結びにかえて

以上、稲場・黒崎が直接にたずさわってきた宗教者・宗教研究者の連携について報告したが、鈴木岩弓東北大学教授が事務局をつとめ、被災者遺族の心のケアに重点を置いて諸宗教が協力して活動している「心の相談室」（http://www.sal.tohoku.ac.jp/kokoro/diary.cgi）や、鎌田東二京都大学こころの未来研究センター教授が代表をつとめ、伝統文化・民俗芸能・聖地文化を活用した復興再生を探る「東日本大震災関連プロジェクト～こころの再生に向けて～」（http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/jp/eqmirai/）など、他にもさまざまな連携の拠点が生まれている。また、研究者の支援活動への参加のかたちとしても、宗教系大学として、一個人としてなど、あまたの取り組みがなされていることと思う。

今後、東日本大震災における宗教者・宗教研究者の対応について、これまでの「宗教と社会貢献」研究の蓄積をもふまえて、反省、検討が加えられることになるだろう。しかし今は、震災の被害はいまだに続いている。研究者も今できるかぎりのことをやろうとしているのが現状である。被災者や支援する宗教者に寄り添いつつ、現在の苦難と課題に向き合うことが必要であろう。